

自由と責任

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

このコラムも前회가100回目、この号で101回目に突入する。いつぞや読者の方々から直接あるいは間接的に感想をお聞きした範囲では許容可能であったことから、気を新たにして勝手ながら執筆をいましばらく続けさせていただこうと思っている。新聞やTVのニュースなどを切欠にしてまとめて数本書くこともあるし、2~3カ月全く書かないときもある。そのような「自由気まま」が許されているから今まで続いた。「安全・安心」という大きなテーマではあるが、筆者の裁量の領域を大きくしてくださっている連合会事務局の方々には心より感謝申し上げる。

「自由」といえば対応する言葉としては「責任」なのか「規律」なのか、考え方にもよるだろう。英国のパブリックスクールでの経験に基づいた池田潔氏の『自由と規律』（岩波新書）はつとに有名である。ここでは規律とは言わないで「自由と責任」と題して、この連載の新たな一步を踏み出したい。

筆者がまだ田舎生活をしていて、少なくとも昭和30年代には、当然ながら上水道、下水道などといったインフラが田舎にあるはずもなく、便所は汲み取り式であった。自宅では尿尿を畑にまいて農作物の肥料としていた。おかげで筆者は回虫などの寄生虫が野菜、食事、便所と循環する一要素としての宿主になっていた。小学校では年に一度虫下しとしてマクリという海藻の一種を飲まされたものだが、給食代わりの脱脂粉乳用のアルミ容器を使ったので、2~3日にわたって脱脂粉乳の味が苦いマクリと混在して最悪だった。

その後、バキュームカーなどが出現すると、便所から汲み取ってきた尿尿を大きな野つぼ（肥だめ）にため込んで栗林の肥料としていたことがよくあった。野つぼは長期間たつと表面が固くなり、枯葉などが積もると地面と区別がつかない。その野つぼへ、周囲の状況を観察すればあるのは明らかなのにも拘らず、近所の子供が学校帰りに道草をして嵌ってしまったことがあった。当該の子供は母親からこっぴどく叱られただけでなく、川に連れていかれて丸裸にされ、かなり長時間にわたって全身を洗われたそうである。いくらよく洗ったとしても数日にわたってにおいが残っていたのは間違いない。

本人の道草と不注意から生じたもので、なおかつ生死にかかわらなかったこともあり、当時話はそれで終わった。しかしながら、いまの時代なら管理不行き届きで大騒ぎになるところだろう。時の経過とともに子供が運動場で転んで骨折したのは学校のひいては先生たちの責任であるとか、本人の不注意、親の不注意についても学校の責任を問うようになり、親が学校、果ては大学にまで押しかけるような時代になっている。筆者なども現役のころ、単位不足で卒業できないと言って弁護士まで出てきた経験がある。大部分の学生は単位習得している科目であった。大学の単位制度について弁護士にはご理解いただいて退散してもらった。もちろん、事象によっては本人の責任、学校や大学の責任と明確に区別しがたい場合もあるだろうが、少なくとも保護者が「息子娘が勉強しないで単位も落とすとしたそうだ。先生から注意して」と訴えるなど、あまりに嘆かわしい事態では

ないか。天下の東大，京大などではこんなことはないかもしれないが，入学式，卒業式などの様子を見ていると，全く同じではないにしてもなにがしか類似の事象がありそうにも思える。

活動に制限を設けるのは基本的人権から考えておかしいのは当然である。だが，その一方で本人も保護者だけでなく社会からも保護されていることを自覚して，自らに対する責任，社会に対する責任を，将来の社会を担うはずの学生諸君には感じてほしいものである。それも含めて大学で教育しろという意見もあるかもしれないが，これは明らかに家庭内教育であり常識でもある。大学はもはや成人した者たちの集まりであるのだから。

今回は新たな第一歩と言いながら尾籠な題材を選んだことをお許しいただきたい。筆者が水洗トイレのなかった田舎育ちであることをご理解いただけたら幸いである。



生成系AIであるchat gptによって制作した筆者の自画像